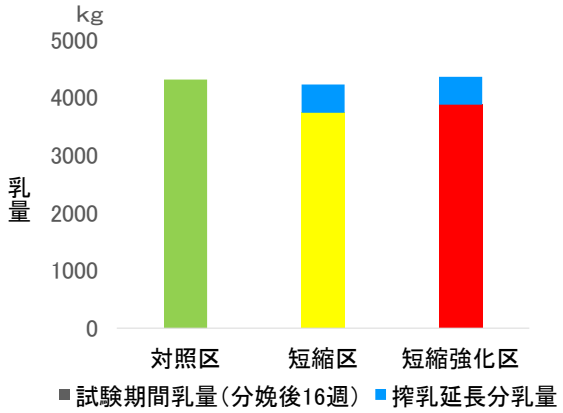
２産分娩前の乳牛の乾乳期短縮が産乳と繁殖性に及ぼす影響

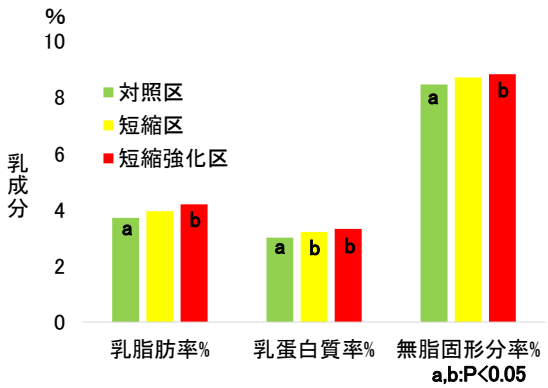
改良により乳量が増加した乳牛では、泌乳初期のエネルギー収支が悪化し、健全性や繁殖性の低下が問題となっています。そこで、2 産目の泌乳初期の泌乳ピークを低減する新たな飼養方法を検討しました。

2 産目の乾乳期※1 を通常の 60 日（対照区）から 35 日に短縮（短縮区）すると、泌乳初期のエネルギー収支が改善し、健全性や乳成分が向上しました。また、短縮による搾乳延長分を含めた乳量は対照区と同等になりました。さらに、バイパス率の高い蛋白源※2 を給与（短縮強化区）することで、繁殖性を向上させる可能性が示されました。



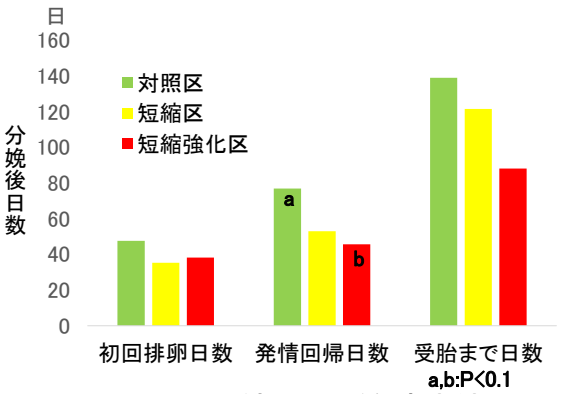
乾乳期短縮による試験期間の乳量

乳量は減少するが乾乳期短縮で搾乳延長した乳量を合計すると同等となった



乾乳期短縮による乳成分の変化

乳成分は短縮区、短縮強化区で向上した



乾乳期短縮による繁殖成績

対照区に比較し短縮強化区で発情回帰日数が短い傾向があった

本研究は農研機構生研支援ｾﾝﾀｰ「革新的技術開発・緊急展開事業（うち人工知能未来農業創造ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ）」の支援を受けて行いました

※１　乾乳期：分娩後 300 日程度で搾乳を中止し、次の分娩まで休ませる期間
※２　バイパス率の高い蛋白源：胃での分解を逃れて効率よく腸から吸収されるアミノ酸

（酪農担当　TEL 048-536-0441）